

2009年度

科目名	文化人類学		
担当教員	坪井 恒彦		
配当	教育3	コード	15150
開期	通年	講時	月曜日5限
		単位数	4
授業テーマ	考古学・民俗学の成果を援用し人類(日本人)の文化の祖型を考える。		
目的と概要	20世紀のアメリカで構築された「文化人類学」の理論・方法論は、日本地域にはそのまま当てはめられない側面を持っています。本講座では、文化人類学の目的を堅持しつつ、理論・方法論に日本の考古学・民俗学の考え方を取り入れ、「人間とは何か」を、彼らが創り出した文化、そして文明を通して追究していきたいと思えます。そこには、私たちを取り巻く現代社会が抱える様々な課題を解きほぐす手がかりが隠されており、将来を見通す「眼」を養うヒントがあるのではないのでしょうか。		
成績評価法	平常点と前期末・後期末の各時間内レポートの内容について評価します。		
テキスト	自作のレジュメ集、資料のコピーを配布します。		
参考書	『文化人類学』編著者 村武精一ほか出版社 有斐閣		
履修に当たっての注意・助言	教壇から学生諸君への一方通行ではなく、諸君からの意見・異論・提案・質問などの積極的な発言を求めます。		
講義計画			
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「文化人類学」とは 2. 文化人類学の歴史 3. 「文化の変動」について 4. 「日本文化」の特性を考える 5. 日本民族の起源を追う 6. 狩猟採集社会の実像 7. 「土器誕生」の周辺 8. 「縄文農耕」の実態 9. 「定住集落出現」の意味 10. 「配石遺構と土偶」の文化 11. 縄文祭祀における仮面文化 12. 縄文巨木文化の背景 13. 縄文時代の流通・交易の文化 14. 縄文人の精神文化再考 15. 総括(レポートなど) 16. 列島の「金属器文化」の特性 17. 「弥生環濠集落」の系譜 18. 水田稲作複合(システム)の影響 19. 「弥生神殿」文化の真相 20. 文化人類学から見た「弥生大型建物」 21. 弥生の司祭者「鳥装のシャーマン」 22. 「銅鐸文化」の実相 23. 「倭人争乱」の文化人類学的な解釈 24. 古墳時代の「導水祭祀文化」をめぐって 25. 古墳時代首長層の精神世界を探る 26. 遺跡から読み解く飛鳥人の思想 27. 飛鳥の「苑池文化」の国際性 28. 飛鳥京の宮殿文化を考える 29. 「日本語」の形成と普及 30. 総括(レポートなど) 			